

日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第80号 (2016年9月1日)

発行者 〒162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学1号館1603A研究室内 日本ハーディ協会
編集者 〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1 福岡教育大学 西村 美保



Saltaire, England

(提供：西村 美保)

ナポレオン戦争時代のドーセット

深澤 俊

大学の勤めからは解放されたが、このところ色々なところで英文学の話をさせられている。形態は学会の特別講演であったり、市民向けカルチャーセンターの講座であったりするのだが、このような話をしながら、英文学はまだ見捨てられているわけではないと思う。

昨年秋はギヤスケル夫人について話す機会があって、『シルヴィアの恋人たち』での press-gang の扱われ方を考えているうちに、ハーディの『ラッパ隊長』に想いがいった。ナポレオン戦争時代のイギリスの状況については、ハーディが子どものときからつよい関心を寄せていた題材となっていて、それが『ラッパ隊長』を経て最後は『霸王たち』の完成にまっていたのだが、当時のナポレオンの脅威はイギリスでは大変なもので、海軍の補強のために press-gang と呼ばれる10人から12人の組織が人攫いさらいのようにして水兵集めをしていた。ギヤスケル夫人は首都から遠く離れたヨークシャーの港町を舞台に、press-gang に反発する住民たちの騒動やら、攫われた人物である鋸打ち Charley Kinraid の人間関係を劇的に描いて小説を完成させた。

ナポレオンが上陸する可能性のあったドーセットを舞台にした『ラッパ隊長』では、press-gang が来ると船員 Bob は女たちの協力も得て、彼らに見つからないように隠れたりもするが、あとで反省して自ら Victory 号艦長の Captain Hardy を訪ね、海軍入りを果たす。Bob と対照的に沈着な兄の John はラッパ隊長としての職務を果たして、最後はスペインで戦死する。ギヤスケル夫人とハーディという、このふたりの作家の press-gang にたいする微妙な違いは、愛国心の問題ではない。ハーディが描きかかったのは、興味深い時代のドーセットの村の 'a fairly true record of a vanishing life' だったのだろうし、ハーディが子どものときに憧れて祖先とも思っていた実在の Captain Hardy まで登場させることによって、身分を越えた親近感が強まる一方で、この時期のゆとりもあるが緊張感のみなぎったドーセットの雰囲気、素朴な温かい人間関係の中で描かれることになる。

この時期の、ナポレオン相手に戦うつもり庶民の気概を描いた芝居は、現在、隔年にドーチェスターで開催されている Thomas Hardy Conference and Festival の出し物にもなっていて、地元の劇団が今はあまり聞かれなくなったドーセット方言を使って、昔の物語をユーモラスに見せてくれるのもドーセットらしさだろうか。

ナポレオン戦争後、海軍の組織は整備され、年金も付くようになって、press-gang が要員を無理やり集める必要はなくなったが、彼らが集め、トラファルガー沖海戦で戦った水兵たちの場合は、退役しても将来が保証されているわけではなかった。『ラッパ隊長』の中の Bob は地主の財産を受け継いだ Anne と結ばれたし、家の製粉業を引き継げばよかったのだが、現実の多くの水兵は失業状態だった。これをドーセットの名家 Minterne House が、かなりの数の水兵を庭師などの使用人として雇用した。1600エーカーの敷地を持つ Minterne House は1620年以來の名家だが、現在は子孫の Digby 夫妻が、この manor house を室内楽の演奏会などのイベント会場や宿泊所として活用して、ホテル経営をしている。ここには、トラファルガー沖海戦時期の帆船の模型が飾られている部屋がある。この館でこの立派な模型を見ていると、『ラッパ隊長』の時代のドーセットの雰囲気が蘇ってくるようにすら思われる。



Press-gang のカリカチュア、1780

(提供：深澤 俊氏)

ハーディと私

中 島 恵 子

ハーディと私の出会いは、奉職して間もない頃のことである。大会で発表させていただくことになり、ハーディ文学の扉を開くことになった。取り上げた作品は『テス』で、その両義性や歴史観からモダニズム的要素を読み解くというテーマだった。至らない発表ではあったが、暖かい質問をいただいたことを今でも感謝している。今、どうしてこんなにハーディ研究が熱心に行われているのか？ どうしてこんなに人気が高いのか？ 2007年に出版された『ハーディ全貌』には、あらゆる角度から網羅的にハーディの研究論文や解説が収められている。そのみごとな分析と底の深さに驚くばかりである。ヴァージニア・ウルフや現代文学を主に研究し、意識の流れや一見筋立てのない心理描写に慣れきっている私には、ハーディの小説は驚異としか言いようがない。どうしていつも男女の係わりやロマンスがテーマになり、風雨や運命のいたずらに苛まれながら、たまにはハッピーエンドもあるが、大抵は悲惨な結果に終るのか？ なぜいつも一人の女性が二人、三人の男性に囲まれて、二重結婚や行き違いが起こるのか？ 代表作の『テス』に至っては、何で彼女があんな目に会わねばならなかったのか？ 読むとたまらない気持ちになるし、今では怒りさえ込み上げてくる。エンディングの部分で、刑場に黒い旗が上がるとエンジェルはテスの妹ライザ・ルーと手に手を取って去って行く。テスが、自分が死んだらかわりに妹をと頼んだとはいえ、妻のテスに夫らしいことを何一つせず、不幸のどん底に突き落としたエンジェルの無責任に唾然とする。アレックは放蕩息子という悪玉なのにテスとその家族のめんどうをみる。善悪の構図は置換可能なのだ。ハーディは産業革命に取り残された地方、古い王国でもあったウェセックスを舞台に、アイスキュロスのような悲劇を書き、同時にヴィクトリア時代の因習を打ち破る力を秘めた作品を企図している。テスの故郷であるマーロットは夢のように美しい。テスが辿ったクロス・イン・ハンドも古代の遺物のひとつだ。悲劇のヒロイン、テスも、古代から今に生きる女性像のすべてを蓄えている。ハーディは、この作品に過去・現在・未来という時の流れを重ねている。騎士の一族の直系に当たる血筋と乳搾りの女というヤヌスのような両面神、DNAに組み込まれた勇気と剣で相手を打ち負かす強靱な力、マーロットをふんわり包む霧のようにやさしい純粋な乙女と男を魅惑する魔女、そして最後はストーンヘンジに生贄となって捧げられ、ドルイド教や汎神論を想起させる古代の巫女。時間は折り重なり、古代―中世―現代へと収斂する。テスの人物像には、平凡な田園の乙女から勇敢なヴァルキューレ、娼婦と天使、そして現代につながるニュー・ウーマンとしての自我とパワーが秘められている。ハーディは、ウェセックスの女神として神秘性を秘めたヒロイン、テスを創造している。また、ハーディの作品によく出てくる「遅過ぎる (Too late!)」という表現は運命を読み解くことができない人間の悲しさと同時に未知の空間に向かって果敢に挑み続ける人間の勇気ある行動を示唆している。

レズリー・スティーヴンの編集する『コーンヒル・マガジン』に寄稿していたハーディと知己であり、夫妻とも歓談したヴァージニア・ウルフは評論「トマス・ハーディの小説」(1928年1月執筆、『普通読者第2巻収録』)の中で、「ハーディが私たちに与えてくれたのは、ある時ある場所での人生の単なる写しではない。それは、力強い想像力と深淵で詩的な才能、やさしく人間らしい魂に顕現した、世界と人間の営みについてのヴィジョンなのだ」と述べ、この大作家への賞賛を結びの言葉としている。一方、テスが星をりんごに喩えて「私たちが住んでいるのは虫食いのりんごのほうよ」と弟に話す所では、まるで作者が突如登場人物に入り込み、セリフを言うようだと言及する部分がある。全知の語り手のやり過ぎだという主旨だが、ウルフ自身にも全知の語り手が物語はそっちのけで芸術論を述べたり、勝手に喋り出したりする作品がある。ファンタジーの『オーランドー』(1928)だが、なぜか『テス』との共通項が感じられる。それはこ

の作品に重ねられた英国の歴史、文化史、文学史、モデルのヴィタ＝サックヴィル・ウェストの家系というハイブリッドな構造である。両性具有の主人公オーランドーが約360年の生涯を送る物語であり主人公が鏡のように時代や文化を写し出す。テスの人物創造にはウェッセックスの歴史と文化が重なりあう。テスがエンジェルとの新婚旅行で訪れた古い館の肖像画はテスの先祖だが、ヴィタが住んでいたケント州ノール城の壁の主人公を思わせる少年の肖像画が『オーランドー』の初版本に挿入されている。ハーディの詩集『幻想の瞬間』(1917)という題名も印象的だ。「瞬間」はウルフの主要なモチーフであり「瞬間、ある夏の夜」というエッセイとそれを表題とする評論集がある。見えない糸に結ばれた二人の作家には有形無形の関係があるようだ。

ハーディと私 その後

伊藤佳子

人生の半ばを過ぎてから大学院で学び始めた。それから早20年になる。修士論文では『日陰者ジュード』を取り上げ、「肉と霊の間の闘い」というテーマで論じたが、その後私の関心はハーディの風景描写に移っていった。なぜならハーディ小説において私が最も心惹かれるのは、彼の風景描写であるからだ。彼が描く風景は単なる地勢描写ではなく、作中人物と緊密に結びついてプロット展開とも深く関わっている。またハーディは、人物の思考過程を明らかにする代わりに、人物の内面世界の相関物を風景の中に求めるという間接的、暗示的方法をしばしば採る。それゆえ博士論文では、玉井暉先生のご指導のもとで、ハーディの六大小説における風景描写と各作品のテーマとの関わりという問題に取り組んだ。

ところで *OED* によれば、landscape という語の初出は1603年である。西洋の絵画ではギリシア・ローマ神話や聖書の主題を扱ったものが多く、風景が描かれることはほとんどなかった。また描かれる場合でも背景として登場するにすぎなかった。それは西洋では、人間中心主義の世界観が支配的であったためであろう。それゆえ西洋における、それ自身が目的であるような風景画の成立は、近世に入ってからである。

ロンドンの建築事務所にゴシック建築の設計士として勤めていたハーディが、ナショナル・ギャラリーに通って巨匠たちの作品を一回に一人の画家に絞ってじっくり鑑賞するのを日課とした1860年代に、「詩は絵と同じである」と言った古代ローマの詩人ホラティウスの著作を熱心に読んでいたことは興味深く思われる。このホラティウスの言葉にあるように、詩と絵、つまり文学と美術は表現手段が違っていても表現する内容は変わらないから、姉妹芸術と呼ばれている。

ナショナル・ギャラリーは創建当初から、17世紀のフランドルの風景画をかなり保有していたので、ハーディもそれらを目にする機会が多かったであろう。それゆえ彼が、そこで出会ったさまざまな作品に触発され、それらから得たイメージを自らの作品に取り込んだことは十分考えられる。たとえば「オランダ派田園画」という副題を持つ『緑樹の陰』では、ディックの母方の祖父ジェームズ老人が身を屈めて畑に向かう姿は「一枚の絵」として、また通りから見える靴職人ベニーの仕事姿は、窓枠を額縁にした「近代のモローニの描いた靴工」の肖像画として提示される。さらにディックがファンシーを馬車に乗せて家まで送る途中に通る、樹木で両側を縁取られた並木道は、ハーディがナショナル・ギャラリーで見たであろうホッペマの《ミッデルハルニスの並木道》を想起させる。一方『狂乱の群れをはなれて』におけるバスシバの農場での羊毛刈りの場面では、4世紀前に建てられた大きな納屋での刈り手たちの作業は、「400年前の額縁にはめこまれた、今日のこの絵」として示される。このようにハーディ小説においては、絵画への言及

は枚挙に遑がない。

さてイギリス風景画の第一人者といえはターナーであろうが、ハーディが1889年にロイヤル・アカデミーで見た彼の水彩画について、「それぞれが風景プラス人間の魂である」と述べていることは、物理的事実を克明に描くのではないターナーの絵画手法から学ぶところが多かったことを示唆しよう。たとえば『緑樹の陰』や『狂乱の群れをはなれて』では、オランダ派絵画によく見られるように、ハーディは田園社会の日常生活に題材を求め、それを写実的な手法で描くことが多い。ところが『帰郷』になると、彼の風景描写は一変する。冒頭のエグドン・ヒースの描写では、象徴的手法が用いられているからである。このことはハーディの芸術観とも深く関わっている。つまり小説家としての彼の関心のありようが、物理的事実を正確・忠実に写し取ることから、後期のターナーの絵に見られるような、「風景の下に横たわる深い現実」の表現へと傾斜を深めていったことと軌を一にしているのである。

またハーディがロンドン時代に教会修復の仕事を数多く手がけた経験は、後の彼の作家活動にも活かされている。『窮余の策』、『青い眼』、『微温の人』の主要人物は建築家であり、教会修復はしばしば用いられるモチーフであるからだ。さらに彼は、ゴシック建築について多くを学んだ経験から、建築と詩の間の類似性に気づき、ゴシック建築の技法原理を積極的に自らの詩作に取り込むことにより、意表をつくような韻律やスタンザを生み出したのである。

興味深いことにジョン・グランディは、姉妹芸術という観点からハーディ作品を詳細に論じている。それを読めばハーディが、美術や建築のみならず、演劇やオペラなどの舞台芸術、音楽など、芸術のさまざまなジャンルから、自己の創作活動に資すると思われるものを意欲的に取り込むことにより、作品を豊かなものに行っていることが分かる。

このようなハーディの芸術の該博な知識には圧倒される思いであるが、以前、玉井先生が、「研究というのは大体十年単位」とおっしゃったことを思い出しつつ、「風景」から次の新たなテーマに向けて研究課題を定めるべく模索を続ける日々である。

過去からの声

——大澤衛初代会長のエッセイをめぐって——

木 梨 由 利

この春、興味深いものを発見した。ところどころ薄茶色の染みができた、古い新聞の切抜きである。紙面の大部分を占めるのは、日本ハーディ協会初代会長の大澤衛先生が書かれたエッセイである。新聞の名前は、『北國毎日新聞』、現在は『北國新聞』として石川県金沢市に本社を置く地方紙である。掲載日は昭和21年（1946年）10月28日。先生の肩書は「四高教授」であって、国立金沢大学として生まれ変わる前の旧制第四高等学校にも「教授」という職位があったことがわかる。

「理想社会の小説」と題したそのエッセイの内容は、トマス・モアの『ユートピア』についての解説である。新聞が全体としてどういうものであったとか、この記事が、単発の記事だったのか、それとも、シリーズ中の一編であったのかというようなことは、残念ながら現在は不明である。ただ、記事が、新聞の3面の左上の隅の「ぶんか」欄に、日展の彫塑の部門で特選を得た作品の写真や、10首ばかりの短歌と並んで掲載されていたことは、切取られた紙片からも知ることができる。シリーズ名や数字などが無いことから想像する限り、定期的にこの種のエッセイが掲載されたという様子はない。いずれにしても、今日の、30ページを超える紙面が数々の美しい写真で彩られる『北國新聞』とは違い、戦後しばらくの、恐らくは限られたページ数しか提供でき

なかったと推測される地方新聞で、取り戻した英語や英文学の記事を掲載して、読者を啓蒙しようとする新聞関係者や当時42歳であられた先生の意気込みが、その記事からは伝わってくるように感じられる。

記事の中で、先生は、ユートピア国の社会を限られた文字数でわかりやすく説明しておられる。すなわち、下水道まで整った衛星的で近代的な町並み、選挙で選ばれる政府、労働の義務、身分の平等、富の公平な分配、その結果生まれる、犯罪や厳罰の不要な社会、男女共学で一般義務制と言える教育制度、信仰の自由、戦争の忌避などについてであり、次のような一文で結ばれている。「『ユートピア』とは『どこにも無いところ』という意味であった、しかしいったいこれは北条早雲や毛利元就らのあばれ廻っていた四百三十年前の昔に書かれた本であろうか？」（原文は旧仮名遣いを使用。）確かに、『ユートピア』が書かれた1515年～16年、現実のイギリスは、絶対王政のもと、まだ女性の君主を知ることでもなかった。モアは現実の世の中とは正反対の社会を想像したということもできようが、それにしても、現状に対する鋭い目と豊かな想像力には驚嘆せざるを得ない。

ところで、このエッセイの背後に、ハーディの影を感じてしまうとえば、先生のご経歴を知るがための先入観に迷わされた「読み過ぎ」と言われるだろうか？先生がこの記事を書かれた時は、すでにハーディ研究の真ただ中におありだったと考えられる。この記事からわずか5年後に、先生が編集された『ハーディ研究』の初版が英宝社から刊行されているし、その改訂版（1977年刊）の「はしがき」で、先生は、「1938年に、ハーディの作品が、おそらくは、『風俗びん乱のおそれのあるもの』として、高等学校で読むことが禁止された」際、驚きと異論を記したご自身の日記の一節を引用しておられるからである。

もちろん、モアとハーディでは、時代背景や社会における立場は、全く異なるし、ハーディがモアの影響を受けたという証拠もない。しかし、社会での不平等を憂え、それぞれの表現で、思いを発信した点では共通している。貧困のために苦闘し、悲劇的な死に至るテスやジュードのことは言うまでもない。経済的には恵まれていても、女性であるが故に苦しむヒロインもいる。モアは結婚における平等のみならず、離婚に至る際の男女の平等も唱えている（第2巻7章）が、万一そういうことが実現していたら『森林地の人々』のグレイス・メルベリーの苦しみなどももう少し軽減されていただろう。先生は、モアの先進性を紹介しながら、同時に、貧しく虐げられた人々に共感の目を注ぎさまざまな差別を告発するハーディの姿もまた見ておられたのではなかろうかと思われてくる。

それにしても、この記事とのなんという出会い！「発見した」と冒頭に書いたが、この切抜きは、実は、ずっと前から私の手元にあったのである。戦前から戦後にわたってある文学愛好家らしい方によって集められ、その方が亡くなられた後、今にも廃棄されそうになっていた数十冊のご蔵書を、偶然によるご縁でいただいて、大学の研究室に置いてからおおよそ20年。この春、退職にあたって書庫用に借りた小さな部屋でそれらの本を整理中に、一冊の本の間からひらりと落ちてきたのがこの切抜きであった。何であるかがわかった瞬間、ちょうど35年前の秋、初めてご自宅にお邪魔して、さまざまなお話をさせていただいた時の大澤先生のお姿がまざまざと蘇ってきた。500年前の『ユートピア』、そしてそれを紹介された大澤先生のエッセイは、想像まじりとはいうものの、さまざまなことを考えさせてくれた。どんなに時を経ても、活字の力は偉大だと、改めて思う。今このタイミングで出てきた切抜きを前に、「怠らず学べよ」という、過去からの声が聞こえて来たような気がするのである。

野心と「それから」

粟野修司

数年前に、ハーディと野心について、この「ニュース」に書いた（第72号）。タイトルはその続編という意味であるが、もうひとつ別の意味を含んでいる。ハーディの長編小説は、ほとんど（若い）主人公の野心や夢が潰える場面で終わって、その後を描かない。それとは異なって、彼の短編小説では野心の成就の後に重点が置かれていて、一攫千金を夢見て植民地へ出掛け、苦勞のあげく、運良く金鉱を掘り当てて、大金持ちになって帰国した主人公が、自分の成就した野心の無意味さを悟って不毛な人生を歩む。こうして、野心とそれが無意味であることを知ってから「それから」を描いて彼の短編は、長編とは別の存在理由を持っている。そのこともタイトルで示唆している。

「主を待つ晩餐」はこの典型で、野心が無意味であることを読者に強く訴えかける。この短編もハーディ小説の定番のひとつである社会的身分の差のある男女が愛しあい、何とか「身分の壁」を乗り越えて結婚しようとする物語である。ふたりは駆け落ちを試みるが果たせず（一度目の不協和音）、男（ニコラス）がそれでは大金持ちになって、身分の差を克服しようとする。運良く、彼はオーストラリアの金鉱で一山当てて故郷へ戻って、元恋人（クリスティン）が他の男と結婚したこと、しかし、現在は事実上の寡婦であることを知る。このときニコラスは自分の野心の成就を確信したであろう。彼女の夫は長い間行方不明で、ならばとふたりは結婚しようとして、クリスティンがニコラスのために晩餐を準備して待つが、そこへどこからか夫が戻ってきて、慌ただしく晩餐を食べてまた出て行って、そのまま戻ってこない。またいつ戻ってくるかも知れないと不安を抱きながらふたりは日を送る。男が晩餐を食べて出ていってすぐ、近くの水路に誤って落ちて溺死したということを知って後も、ふたりは結局結婚に踏み切ることができず、オーストラリアで稼いだ大金も使われないままであった。この短編小説も成就した野心の無意味に気づく主人公を描いている。ニコラスの結婚しようという申し出に、「虚しい毎日でも、今のままをふたりで一緒に楽しみましょうよ」と答えるクリスティン（二度目の不協和音）の、結婚さえも不毛の選択という「悟り」の言葉が重い。ハーディは彼女の言葉に旧約聖書「コヘレトの言葉」第9章第9節—「太陽の下、与えられた空しい人生の日々／愛する妻と共に楽しく生きるがよい。それが、太陽の下で労苦するあなたへの／人生と労苦の報いなのだ。」—を強く響かせている。ハーディが聖書を引用するときの通例に倣って、アイロニーとしてこれを読むことが可能である。ニコラスの経験したオーストラリアでの「労苦」の「報い」として「愛する妻とともに楽しく生きる」ことも叶わなかった。彼が生きているのは「むなしい人生の日々」のみ。

「困惑した牧師」のタイトル・ロールは平凡な家庭生活を夢見る牧師である。この作品の登場人物で野心の系譜につながるのは、その恋の相手である、密輸業を代々営むリジー・スモールベリーであろう。この中短編はふたつのエンディングを持つという点でもハーディの作品らしいが、リジーの野心を考慮するならば、彼女が「改心して」ストックデールと結婚し安穏な暮らしを送るという「正統な＝読者におもねる」結末は似合わない。リジーはハーディの創作したもつとも野心的なヒロイン、エセルパータに、ストックデールはジュリアンに対応することを思い出すべきだろう。（ちなみに、『エセルパータの手』には、その数でハーディの他の長編小説を圧倒する11個の「野心」という単語が含まれ、そのほとんどがヒロインについて使われる。）ストックデールがメソヂスト派の牧師であることも彼の野心とは無縁の性格を示唆している。野心を放棄したクリム・ヨーブライトが最後にメソヂスト派巡回宣教師になるのも同様である。野心を抱く人なら国教会の聖職者を目指すだろう。それは「三人の野心家の悲劇」に書かれているとおり、栄達につながるから。（国教会の牧師と同じように非国教派の牧師でも福音を説くことは

できるよと言うコーネリアスに答えて、ジョシアが、「福音を説くだって、でも立身出世できないだぜ」と答えている。）

「困惑した牧師」をリジーの野心の文脈において読むと、ウィスコンシンへ移民して、そこで開拓者として暮らすという二番目のエンディングがふさわしい。そのプロットでは、リジーもその従兄弟で連れ合いのオーレットもイギリスへは戻らない。野心の成就が植民地でなされ、その成果を持って帰国するというパターンから逸脱したプロットが作者自身の意図だとハーディが注で書いていることに注目したい。「あなたは国教に反対し、私は王様に反対しているの」とヒロインに語らせたハーディもコンヴェンションにディセントしているのである。

夢や野心の途上で斃れるのと、野心や夢にたどり着いて、それが虚しいと悟るのと、そのどちらも読者に強いメッセージを伝えるが、救いのないのは後者ではないか。目的が目的たり得ないということを知ってしまったら、目的だけでなく、人生そのものも無意味になってしまう。夢や野心が成就しないまま死んでも、それによってそれまで生きた人生が無になることはないが、目標に到達したものの、目的の無意味を悟った人は後ろを振り返ることも前を見つめることもなく、その後の「虚しい人生の日々」をとぼとぼと歩まねばならない。野心と「それから」を描くハーディの短編の余韻は常に暗く重い。

『トマス・ハーディの生涯』を読むと、ハーディ自身が自分の「成功」に困惑している様子があちこちに見られて興味深い。それは当たり前で、挫折する主人公、あるいは野心に背を向ける主人公を描きながら、自分は作家として成功してしまったからである。そういう前提なしに『生涯』のページを繰ると、ハーディは俗物であると思ひ込んでしまいかねない。あの自叙伝を読みながら、(ストックデールよろしく)「困惑した」ハーディを読み取るのも読者の力量。そうそう、タイトルの「野心と『それから』」には、野心を放棄しながら、成功してしまったハーディ自身の「それから」も含めたつもりである。

《シンポジウム予告》

土地と表象

イントロダクション

風 間 末起子

土地というテーマは文学の世界では基本的なテーマだが、かといって踏み込むと足がもつれそうに思うのは、それが根源的であるのに複雑で入り組んでいると察するからであろう。そこで、今回は専門分野の異なるパネリスト3名によって、三つの視座から土地というものが“represent”するものを探っていけたらと思う。

まず初めに、エリザベス・ギャスケルを専門とする河井氏には、小説『北と南』を中心に、「都市と女性」というジェンダーの視点から発表していただく。硬質なイメージが先行する工業都市に女性が関わった場合どう解釈されるのか。一つの可能性を開示してくれそうだ。次に風間はハーディの後期作『森に住む人々』の中のマーティ・サウスという寓意的な女性人物を取り上げて、土地は人々に移動を促すものという仮説を例証してみたい。最後のパネリストの潟山氏は人文地理学やイギリス地域研究の専門家であるが、氏は主にフィールドワークを通してイングランド南部のサセックスの民謡を実地調査・研究している。今回は、潟山氏の案内で、ハーディのサウンドスケイプの世界をのぞかせてもらおう。

土地と表象—ギヤスケルの場合

河井純子

『北と南』のタイトルが、北（工業都市文化）と南（農村文化）の対立と融合を表しているもので、ヒロインがそのエージェントであると考えるのは、まずこの小説に対する妥当な解釈であろう。マーガレットはヘルストン、ロンドン、ミルトンを移動し、最終的に彼女が居場所を求めるのは工業都市ミルトン、すなわち階級社会の変化が肌で感じ取れる、流動性の高い土地である。

「女王のような」とたびたび形容される、静かな威厳の持ち主マーガレットだが、彼女はただ運命を受けとめ、置かれた場所に馴染もうとするわけではない。彼女には、家庭のみに自らを捧げるような生活には納まらない鋭い判断力、勇気と情熱がある。彼女が文字通り、対立の最前線へ身を置くことさえするのは、正義を求める作家のメッセージの直接の担い手に相応しく、自立してゆく存在だからだ。その機会を与えるのが新興都市ミルトンであり、しかもここは、克蘭フォードのような空想的理想郷ではない。

今回、『北と南』において、ミルトンの負の面を理解したうえで自らその躍動性や前進の一部になってゆくヒロインに注目し、都市の可能性を示した作家の意図を探ってみたい。

妖精マーティ・サウスの住む森

風間末起子

パストラル的な田園描写に秀でるハーディではあるが、後期作 *The Woodlanders* (1887) では田舎と都会の単純な対立構図はくずれ、生存競争が自然と人間すべてに行き渡っている。ヒントックの森はもはや安住の場所ではないし、都会のよそ者が必ずしも敗北者になるわけでもない。土地の共同体も、接着剤としての従来の機能を十全に果たすわけではない。

こうした土地の持つ不安定さを表象するのが多分に寓意的な人物マーティ・サウスではないか。そしてハーディがマーティを創造した意図は土地の流動性や移動性を示唆することにあったのでは、というのが私の考察の出発点である。

悪戯好きな小妖精に似たマーティの属性と使命、マーティ—フェリス—グレイス3名の女性のあいだの分身的な移動と補完性、マーティの脱俗性の意味、こうした三つの観点から、「移動の表象としての土地」を例証してみたい。

ハーディは何を聴いたのか

湯山健一

ハーディが幼少期を過ごした1840年代は産業革命も終盤に差し掛かる時期で、鉄道投機熱によってグレート・ブリテン島全土に張り巡らされた鉄道網もいよいよ完成に近づいていた。鉄道は人が直接出向き得る世界を広げ、自らの生まれ育った「郷土」を外化する契機を与えるが、こうして「郷土」を後にし、そこから出ていくという空間的な移動と、すでに出ているという時間的な事後性が「故郷」というものの存在を可能にする。*The Return of the Native* (1878) をはじめとする彼の作品の背景としてある「田舎」と「都会」のコントラストなどハーディ自身がロンドンへ移動する機会なくしては描き出し得なかったものであろう。地理的想像力によって構築されたこの「故郷」と、当時一般にはまだ文化の一部などとは捉えられていなかったであろう庶民的な要素、とりわけ *Far from the Madding Crowd* (1874) など複数の作品に取り上げられている民衆の音楽 (folk music) を、果たして彼は重ね合わせて見ていたのか、それとも無関係なものとして捉えていたのか。本発表では、この辺りに着目しながら、イングランドにおける第一次フォークソング・リヴァイヴァルに先駆けて彼の示した庶民の音楽に対する関心が、どのような向きのものであったか検討してみたい。

《特別講演予告》

「トマス・ハーディとともに五十年」 —近代文明の警鐘者として—

同志社大学名誉教授 那 須 雅 吾

田園作家のハーディが近代文明の脅威に関心があったと云えば大いに違和感があるかも知れないが、他の作家の中で近代文明の急激な発展とその悪影響に彼ほど危機感をもって作家は他に例がないと云っても過言ではないのである。

文明開化についての問題作、『帰郷』では、その冒頭の章で「文明はエグドン・ヒースの敵である」と述べている。このエグドンとはこの土地の住民のことであるから、その住民たちの敵は「文明開化」そのものなのである。それを裏付けるように主人公クリムが近代文明のメッカ、パリから文明社会の敗者として帰ってくる。そのクリムを筆頭にユーステイシア、ワイルディープ、ヨーブライト夫人などが文明開化の被害者となっている。

特に、彼の晩年の作品『テス』、『ジュード』では主人公テス、ジュードにとって文明社会はまさに「心の荒野」そのものと化している。テスの場合、かつては彼女の名門の祖先が権勢をふるった領地も家系・名前すらも買収され、彼女の時代ではアレック・ダーバーヴィル家の王国であり、領主アレックが思うが儘に支配する文明社会である。従ってテスが如何に苦しもうとエンジェル以外はただ冷ややかな視線を送るだけで誰一人として彼女を思いやる人間・隣人は存在しない。これが非情な、「心の荒野」と化した文明社会の姿そのものなのである。

ジュードの場合も、大学を目指す金がなく職業が石工という理由だけで玄関払いである。さらに石工の仕事に精出そうとしても、正式に結婚していないこと、子供が多いこと等で寝泊まりする宿すらない。それに気づいた長男が弟たちともども死を選ぶ。その悲劇のためジュードはスーと別れ、孤独な死を遂げている。

しかし、このようなテス、ジュードの悲劇に涙しても、二人を悲劇に追い込んだ文明社会の非情さに目を向ける読者は極めて少ない。しかし、その近代文明の非情さ、残酷さの描写こそがハーディが目指した作品の真の意図であったと考えられるのである。

《内外ニュース》

会員による研究書：清水 伊津代、小野 ゆき子、上原 早苗、津田 香織、小林 千春、清水 緑、土屋 倭子、新妻 昭彦、宮崎 隆義著（掲載順、ハーディに関する論文執筆者）

『文藝禮讃——アイデアとロゴス——内田能嗣教授傘寿記念論文集』（大阪教育図書、2016年3月）

《編集後記》

表紙の写真のSaltaire（ソルティア）はイングランドのブラッドフォード近郊に位置し、19世紀に工場労働者の環境を整えるために建設された町で、現在では世界遺産に指定されています。イギリスの風景はいつも心を癒してくれますが、最近では移民、テロ、イギリスのEU離脱の問題などで特にヨーロッパは混沌としており、出かけづらくなっていて、残念なことです。

さて、今回も執筆者の皆さまには、暑い最中に充実した内容の原稿をお寄せ頂きまして、誠に有難うございました。執筆者の方々のご協力、中央大学生協印刷部の藤様のご尽力に、心からお礼申し上げます。次号は4月発行予定で、原稿締め切りは2月20日です。論文、随筆は2000字程度、短信、個人消息は500字程度です。皆様、奮ってご寄稿ください。尚、ハーディに関する著書、翻訳は編集者までご連絡ください。お待ちしております。